

---

# 氷の華の咲く場所は

はっち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

氷の華の咲く場所は

### 【Nコード】

N1894BA

### 【作者名】

はっち

### 【あらすじ】

治癒魔法の魔術師を排出することで名高いリスト家の娘、リヴ・リン・リストは、治癒魔法の力を持っていなかった。リスト本家の娘としての役割を果たせないと悟るリヴは、若くして恋愛も魔術師としての成功の道も閉ざされて、絶望する。

人生捨て鉢な女の子リヴが、型破りな同級生と出会い、心を、人生を大きく揺さぶられて前向きに成長していくストーリー（予定）。

現在、大学編。お下品発言が入りますので苦手な方はご注意下さい。

## 最低の結末

判っていた。多分そうだと判っていたから。早めに判って良かったんだと思わなければいけない。

一つだけはつきりしているのは、全てが終わったということだけだ。

ここはサファイロス帝国の帝国立大学。魔術による軍事力が発達したこの国では、一番のエリート達が帝国大に入学し、卒業と同時にほぼ全員が帝国軍に入隊する。いわば国中のエリートが勢ぞろいする、出世のための登竜門とも言える大学に、この物語の主人公、リヴ・リン・リストも通っていた。

彼女は今、大学一年生の前期が終わったところ。専攻した治癒魔術の教授の部屋に呼ばれ、面談を受けている。

貴族令嬢として英才教育を受けてきた彼女が帝国大に入学したのは、至極普通の流れだが、他の生徒のように成績表を配られて終わりではなく、あえて教授の部屋で面談を受けているのには、彼女には深刻な理由があった。

机の上のリヴ成績表には、可、不可、の文字しか並んでいない。お世辞にも優秀で褒められるために呼ばれたような成績ではなかった。それに加え、先ほど手渡された魔力属性の診断結果が、リヴを絶望の底に叩き落している。

診断表には、火、氷、土、雷、と、沢山の属性が記載されていて、それぞれに対しての向き不向きが書かれている。リヴが一番最初に目にした、治癒、の欄には、見まごうことないくらい完結に「素養

無し」の4文字が踊っていた。

机の向こう側で向き合って座る面談相手の教授が、すまなそうな顔でリヴに声をかけた。

「貴女の家の事情もわかります、辛いお気持ちなのも判るのですけれど、例えば氷魔法の…」

「有難うございます。」

教授の声をさえぎって、リヴは顔をあげた。にこり、と優雅な微笑を浮かべる。その微笑が悲痛だったことに教授は気づいたのだろう。黙ってリヴの言に耳を傾けてくれた。

「素養がないのであれば、これ以上無理に治癒魔術を専攻させて頂いても無駄ではないかと思えます。…まずは父にこの結果を報告して、専攻をどうするかについては、また…」

気丈に話そうとするリヴの声が、喉につかえた。リヴは涙が出そうになるのを必死に堪える。最後まで言い切れなかったリヴを察した教授が、にこりと優しい微笑をリヴに向けた。

「ええ、そうなさい。一年生の後期が始まるまでには時間があるし、ゆっくりご家族と相談して決断すれば良いわ。」

治癒魔術師の一族の嫡流、本家の娘として生まれたリヴは、今まで治癒魔術の英才教育を受けてきている。なので帝国大に入る前から治癒魔術がどうやら使えないようだということは判っていた。それでも厳しい父の言いつけにより、入学時に専攻を治癒魔術として半年間過ごしてきたが、やはり教授の目から見ても「違うのではない

か？」というのは明らかかなようだった。

リスト家特有の容姿である淡い水色の髪と瞳を持つリヴは、その容姿もあって同級生たちの間では格好の噂的だった。その容姿を持つ者はつまり、リスト家一族の者、イコール優秀なヒーラーと見た目で判断出来るので、最初はこそぞって皆近づいてきた。

それが、実技でほぼ0点を取るリヴを見、影で言われているあだ名が「偽リスト」。何とも不名誉で、リヴの最も傷つくあだ名だった。

教授が連絡先の書かれた名刺をリヴに手渡し、いつでも連絡しなさいと言った。リヴは立ち上がって、有難うございますと感謝の言葉を述べ、優雅に頭を下げる。

失礼しますと言って教授の部屋を出ようとしたところで、リヴよりも先に扉がカチャリと開き、誰かが顔を突き入れてきた。

「おわっ！ …と、失礼。学生が来てたのか。」

「まあ、ケイン教授。」

リヴの教授が言ったケイン、という名は知っていた。接近戦の実技を担当している人物。教え方が上手いと生徒に評判の教授だ。リヴが入学するよりも先にこの帝国大を卒業している姉が、優秀な方だと褒めていたこともある。

リヴは後衛、治癒魔術の講義しか取っていなかったため、前衛の講義を担当する彼の顔を見たのはこれが初めてだった。きよとんとして、リヴよりも頭数個分上にあるその顔を見上げる。

「うちの生徒のペア決めでちょっと相談ごとがあっってきたんだけど。そっちのヒーラーで…」

リヴのことなど目に入らないかの様子で、ケインは砕けた口調でリヴの教授に仕事の話を始めた。自分は邪魔になるだろうと感じ、リヴはぺこりと頭を下げ「失礼いたします。」と挨拶すると、するりと扉の隙間から部屋を出た。

カツカツと踵の音を立てて早足に廊下を歩き、建物から出る。空は嫌味のように晴れ渡っており、はじまりかけの夏の日差しがリヴの白い肌に暑く降り注いだ。

(終わった。全て終わってしまった。)

気温と反対に、リヴの心は冷たく沈む。

リヴの足は慣れた道のりを進み、リヴの家へと向かう。真っ直ぐ帰りたくないのに、令嬢として育てられたリヴは、寄り道して気晴らしが出来る場所など知らない。

## 父との確執

帝国軍にて優秀な治癒魔術師、つまりヒーラーを輩出する名家、リスト家。

その嫡流として生まれ、数々の英才教育を受けたリヴ・リン・リストに、ヒーラーの素養なし。

この最低の結末を父や姉に伝えるにあたり、リヴには心強い味方が居た。リヴの家庭教師である遠縁の伯母、エスメロードである。

硬い表情で屋敷に戻り、まっすぐ自室に向かったリヴの元へ、使用人からリヴの帰宅を聞いたエスメロードが真剣な眼差しで向かってきた。二人は目と目で会話をすると、静かに部屋に入る。

「リヴ様、……結果をお聞かせ頂けますか？」

リヴの冷たく冷え切った心を暖めるような表情で、エスメロードが優しく囁く。リヴは、おずおずと成績表と診断結果を取り出し、エスメロードに手渡す。彼女がこくりと頷いて紙を開いたところで、堪えていた涙が溢れた。

「わたくし、だめだったわ……。わかってはいたのけれど、でも、……！」

喉の奥が引きつって、最後まで声にならなかった。エスメロードは紙から目を外し、リヴの両目を見つめてから、ぎゅっと抱きしめてくれた。

「リヴ様、ああ、リヴ様、何という……！」

エスメロードの胸に顔を押し付け、リヴは嗚咽を漏らした。

「悔しい、悔しいわ先生！ わたくし、わたくしは、やっぱり出来損ないでしたの！ ヒーラーにはなれない、リスト家の役割を果たせない！」

抑えていた気持ちを一気に溢れさせるリヴを、エスメロードが抱きしめ、全てを受け止めてくれる。

リヴの診断結果、「治癒魔術の素養無し」というのは、どんなに努力しても治癒魔術は使えないと確定したという意味である。それは、治癒魔術の名門であるリスト家嫡流としては信じられない現実であった。

「リヴ様、ご当主様を、お父上を信頼なさいませ。この結果を見てまでも、ヒーラーになれとなど仰られませんかでしょう。リヴ様はご当主様の可愛い娘でございます。きっと、他の属性に専攻を変えれば良いと仰いますわ。」

「そう…かしら。」

厳格な父の顔がリヴの脳裏に蘇る。今まで治癒魔術の練習をいくらしても結果が出なかったリヴに対し、父はずっと「素養があるのに努力を怠っている」という評価を下し、激しく叱咤をする。

リヴだつて努力はしてきた。エスメロードに習い治癒魔術の知識をつけてきた。彼女のおかげで、座学ならリヴはエリート揃いの帝国大でもトップだった。そして今回、教授の勧めで魔術属性の診断を受け、結果が「治癒魔術の素養無し」だ。

ここに関してはもう、努力でカバーできる部分ではないのだから、父も判つてくれるだろう。

少し気を持ち直したリヴに、エスメロードが強く頷いてみせる。



「まずはわたくしから、父上にお話して参ります。」  
エスメロードの強く優しい眼差しに、リヴは心底救われた。ほつとエスメロードにしなだれかかり、ありがとう先生、と呟く。エスメロードが懐から柔らかなハンカチを取り出し、涙に濡れるリヴの頬に優しく押し当てた。

エスメロードが出て行ってからどのくらい経っただろうか。リヴの部屋に、当主である父の執事で、リスト家の家令がやってきた。

「リヴお嬢様、ご当主様がお呼びです。書斎までお越し下さい。」  
静かな口調でそう語る家令がリヴは少し苦手だ。幼い頃遊んで貰ったことはあるが、魔術の練習が始まったころからは父と同じく、厳しい視線を向けてくるような気がしている。

「…わかったわ。先生は？」  
「一緒に書斎におられます。」  
リヴはすっと立ち上がる。こうして呼ばれることは予想していたので、泣いてしまって崩れた化粧も直し終わっている。

家令を伴い、父の書斎まではすぐに着いた。緊張を隠すようにノックをする。

「お父様、リヴでございますわ。」  
腹に力を入れてそう声をかけると、父の声が「入れ」と返事をした。

父の部屋は、ドアを開いた正面に、大きな窓を背に執務机が構えている。

その前に向かい合ったソファとセンターテーブル。

父は執務機の向こうで、赤くなりかけた空を眺めていた。表情は見えない。エスメロードはソファのひとつに腰をかけ、青白い顔で俯いている。

「リヴ。」

父の低い声に身を震わせながらも、リヴははい、と乾いた返事を返した。ふいに、父の執務机の上に、さきほどエスメロードに渡した成績表と診断結果があることに気づく。成績表は開かれていて、昼間にリヴも見た、可、不可の羅列が見て取れた。

緊張でドアの前に立ったまま動かないリヴを、家令が奥へと促した。ゆっくりと重い足取りで父の近くまで近寄る。あの診断結果を見れば、リヴが努力してもヒーラーになれないと判っているはずだ。

ごくり、と唾を飲み込んで執務机の前に立ったリヴに、父はゆっくりと振り向いた。その視線に、リヴの全身は氷に包まれたかのごとく冷え切った。

父の目は、怒りに燃えていたのだ。

「お前は、リスト家の恥だ。」

父の言葉が氷の槍のようにリヴの心に突き刺さった。驚きと恐怖で目を皿のように開く。

「私はリスト家の当主で、お前はその嫡流である。」

父は冷たい視線でリヴを、汚いものを見るかのように睨みつけた。

「嫡流は、リスト家の模範としての行動を常に意識しておらねばならない。お前が何を求められているのか、答えてみる！」

静かだが激しい怒りを含んだ口調に、リヴの膝が震えた。絶望と恐怖で、喉がカラカラに渴く。浅く何度も呼吸をしながら、リヴはやつつのことで声を出した。

「…リスト家は、強力なヒーラーを輩出する帝国の名家です。治癒魔術は軍のみならず、市井でも重宝される貴重な魔術です。わたくしはリスト家の嫡流の娘として、優秀なヒーラーとして帝国軍に仕え、戦果を上げなければいけません。」

生まれてこのかた刷り込まれてきた、リスト家嫡流の役割を、リヴは流れるように答えた。父は冷たく睨みつけたままだ。リヴは続ける。

「私は長子ではございませんので、いつかリスト家を出て嫁に行きます。優秀なヒーラーとなり良き伴侶を得、リスト家一族の繁栄に外から貢献することが、わたくしの役割と存じます。」

言いながらリヴは悔しさと悲しさで、喉を震わせた。両目からは勝手に熱い涙が零れ落ち、せっかく化粧を直した頬を濡らしていく。言い終わったリヴを、父はギロリと射殺すように睨み付けた。

「この出来損ないの頭でつかちが。そこまでつらつらと答えておきながら、なぜそれが行動できぬのだ！二度とこのようなものを私の目に入れるな！」

父はリヴの成績表と診断結果の紙を掴むと、腕を振り上げて乱暴に床に叩きつけた。紙で出来た軽いそれは、ぱしんと乾いた音をたてて床へと当たる。

それを目で追いながら、リヴは、うつつと嗚咽を漏らす。

「しかし、しかしお父様、その診断結果によればわたくしは……」  
「出て行け！」

リヴの言葉を遮った父は鬼のような剣幕で腕を振り、扉を指差す。

「当分、お前の顔など見たくもない！ この恥晒しめ！」

言葉を失って立ち尽くすリヴを、エスメロードが後ろから支え、さあと小さく囁く。彼女に連れられて父の書斎を出たリヴは、怒りとも悲しみとも何とも言いがたい感情が渦巻き、言葉を出すことも足を踏み出すことも出来なかった。

エスメロードが侍女を呼んで、リヴは両側を支えられるようにして自室に戻った。

自室の扉を閉じると、エスメロードが青白い顔で、リヴの顔を覗き込む。

「リヴ様、お父様は混乱しておいでなのです。ご当主として厳しい方故、あのようなことを仰ったのでしょう。しかしいつかきつと判って下さいますわ。わたくしがずっと付いております。わたくしはいつも、リヴ様のお味方です。」

「エスメロード……！」

リヴはエスメロードの胸に飛び込んで、わあわあと声をあげて泣いた。

どうしたら良いのかも判らない。今までの必死の努力、治癒魔術の素養がないこと、父の激高。

怒ったら良いのだろうか。それとも、悲しんだら良いのだろうか。

リヴは自分の気持ちを全くコントロール出来なかった。

何か行動を起こさなければいけないということは判るものの、何をしたら良いのか、どういう方向を向けば良いのか判らなかった。

泣きつかれて眠りについたリヴの頬を、エスメロードが優しく撫でた。

## 父との確執（後書き）

嫡流≡本家筋、という意味で使用します。

主人公は男でも長女でもないのですが、本家筋の娘として重責を担わなければいけない、という教育方針です。

## リトルガーデン

あれから二日間、リヴは自室に籠もって過ごしていた。

考えども考えども、自分がこれからどうしたら良いのか、答えどころか方向性も見出せないでいた。

三日目の朝。ふと外を見ると、庭師たちがせつせと腐葉土を運んでいる姿が見えた。

「そういえば…」

リヴはふと、庭の一角に設けて貰った、自分の薔薇園を思い出す。薔薇はリヴの唯一の趣味で、他人に誇れる得意なことだった。

そろそろ暑さも増してきたし、自分の薔薇園も夏用の手入れが必要な時期になってきている。

リヴは手早く身支度をした。化粧はせず、髪だけさつとハーフアップにくくり、レースの部屋着から汚れても良い庭弄り用のズボンとシャツに着替え、エプロンを身に着ける。およそ貴族令嬢とは思えない服装だ。

1階に設けられたリヴの部屋からは、そのまま庭へと出られるようになっていたので、クローゼットからモスグリーンの長靴を取り出すと、ベランダの窓を開けた。途端に部屋の中から飼い猫のチャコが風のように飛び出す。庭の向こうからバウバウと吼えながら番犬のジェニファーが駆けてきて、子猫と大型犬が仲良くじゃれ合い出す。

(ずっと外に出てなかったから、チャコちゃんも寂しかったのかな…)

その様子を見て、リヴは目を細めた。

リスト家の庭は広大で、何人もの庭師が働いている。

リヴはベランダの隅においてあったバケツとスコップを手に取ると、庭の隅にある一角でバケツの中に藁を入れる。そのまま、手入れされた芝生の上を、さく、さく、と音を立てながら歩き、植え込みに囲われた小さな薔薇園へとやってきた。

そこはリヴが好きなように薔薇を育てている薔薇園だった。ひとりの庭師がリヴの姿を見つけ、立ち上がってぺこりと頭を下げる。

「お嬢さん、体調を崩されたって聞きましたけど、もう大丈夫なんですか？」

「ありがとうございます。うん、もう大丈夫よ。薔薇が気になって来ちゃったの。」

「そりゃあ、良かった。薔薇たちも、お嬢さんが来てくれねえってへろへろで。」

ロイという名の青年は、汗の浮いた額をぬぐいながらニカリと笑った。もう30になるうかというその青年庭師は、リヴの薔薇園を預かってくれている。彼の親の代から庭師としてリスト家に仕えてくれており、父からの信頼も厚い好青年だ。

「おーい、お前たち。お嬢さんから勉強させてもらえよー。」

ロイの声に、歳若い庭師たちが近づいてきて、リヴの手元を見つめる。

「根元のあたりに藁をかぶせて、暑さから守るのよ。」

リヴは持ってきた藁を、一本の薔薇の根元に敷いた。若い庭師たちはその様子を見つめながら、なるほど、などと声をあげた。

「俺、もつと藁取ってきましようか？」

ひとりがリヴに問いかけたので、リヴは周りを見回してからニコリ



と笑った。

「あの腐葉土でも代用できるから大丈夫よ。やってみて。」

「わかりました!」

リヴの手をまねて、他の庭師たちも薔薇の根元に藁や腐葉土を敷き始めた。

「私は剪定をしようかな。」

エプロンの前ポケットから選定用バサミを取り出すと、リヴは手際よくパチンパチンと古い枝を落とす。

何かに夢中になっている間は、憂鬱な気持ちは忘れることが出来る。リヴは一心不乱に薔薇を扱って、額の汗をぬぐう。リヴのために口イがパラソルを持ってきてくれて、白い肌が日に焼けないよう日陰を作ってくれた。

「額に汗するリヴお嬢様、綺麗だよなあ。」

「お優しくて気さくで、それでいて高貴で…。まるで薔薇のようだな。」

「ぶつ。お前中々詩人だな!」

「いや、でも思わねえ? あのリスト家特有の淡い水色の瞳と髪。あの色の薔薇があつたら…」

「…あつたら綺麗だろうな。」

「あんなお嬢様、他のどの貴族の家にも居ないだろうよ。」

「でも大学で上手くいってないらしくて。」

「聞いた。先日ご当主様がお怒りになったとか。」

「…お嬢様、おかわいそうに。」

リヴを心酔している若い庭師たちが、遠巻きにそんな会話をしていることなど、当のリヴは知る由もなかった。

「おいお前ら！　口じゃなくて手え動かせ！」  
「へ、へい！」

彼らを叱り付けるロイもまた、優しい眼差しで薔薇を見つめるリヴに視線を送ると、ふっと笑顔になったのだった。

## リトルガーデン（後書き）

植物についてはど素人ですので、間違い等ありましたらすみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1894ba/>

---

氷の華の咲く場所は

2012年1月6日17時54分発行